
Which came first, the chicken or the egg?

久藤雄生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Which came first, the chicken or the egg?

【Nコード】

N0810BA

【作者名】

久藤雄生

【あらすじ】

ノーグ・コンフェクショナリー補完編。蛇足編。前作の多大なネタバレを含みます、ご注意ください。

またあだ名呼びです。すみません。わりとすぐ終了すると思います。

え、また？ この学校呪われてんの？

三階の渡り廊下から、空を見上げる。

あの日も晴れていたことを思い出す。懐かしい、高校時代の不思議な体験。友人との別れ。

チャイムが鳴り、遅刻していることに気付いた。足を速める。目的は多目的室だ。

「お待たせー！」

多目的室の扉を開ける。

灰色のタイルに木製の長机。それにパイプイスが二脚ずつ。そこに座る生徒たち。

教卓の上にプリントや手帳、筆記用具などを乗せた。

「……揃ってない」

明らかに足りない人数に、不満の声が漏れる。呼び出した人数は十一名。今いる人数三名。少なすぎやしないか。

「来るわけないじゃーん！ メグもまこっちゃんじゃなかったらブツチしてたしー！」

それはどうも、と言うべきか？

ガラではないが教職に就き三年目。何故か生徒にあだ名で呼ばれる扱いだ。良く言えば親しまれている、悪く言えば舐められている。

苦い顔をする教師もいるが私は別に気にしていない。むしろどうで

も良い。

「大体さー、サボり常習犯呼び出して来ると思う方がおかしくな
い？」

メグの言うことはもつともだ。

呼び出した十一名は遅刻や無断欠席、無断早退の常習犯。その中で
もイエローカード一步手前の生徒がメインである。

「まーね、でもやらないわけにはいかないしね」

「まこっちゃんも大変だねー」

生徒に同情されてしまった。そう思うならきちんと学校来てよ。

私は生徒指導でないのだが、パシられているのである。そのせいか
次期生徒指導候補らしい。なんだ、ジャージが悪いのか？この学校、
何故か代々生徒指導はジャージなのだ。私はただ体育教師だからジ
ャージ着用なだけなのに。

「せんせー！俺今日バイトだから早くー！」

「はいはい、じゃあ席についてー！。吉澤、イスに座って、机には座
らなーい！」

「はーい！」

ここは幼稚園か。

「今日はサボりの生徒指導だけど、吉澤、金髪はアウトだから。染
めてきて」

「地毛でーす」

「証明書持って来い」

もちろん吉澤の両親は純日本人である。そして根元じゃちょっと黒い。

「梶山も一応起きて」

メグこと恵美^{えみ}、吉澤、机に突っ伏している黒髪ゆるパーマの男子生徒、この三人しか集まっていない。さすがにもっと集まると思っていたのだが。

のそりと起きた梶山を見て、指導開始。

指導と言っても渡されたプリントを配り、出席日数関係の説明と警告をするだけ。さくさくやれば十分足らずで終わるはずである。

「梶山は進学するつもりなら真面目に来るように」

サボりの常習犯は圧倒的に商業科、工業科が多い。梶山のように進学科の生徒が不真面目なのは稀。高校時代から合わせて今まで、ジロと梶山しか知らない。

梶山は無言のまま頷き、手元のプリントに目を通し始めた。

「要するにサボンなっでことでしょー？ それよりまこっちゃん、またお菓子作って来たの、食べて食べて！」

メグは彼氏に手作りのお菓子をプレゼントしたいらしく、練習中なのだ。練習しては食べ切れないからと最近よく学校に持ってくる。最初は微妙だったお菓子も、今では美味しく仕上がっている。

「あとでね。メグも吉澤も一応プリント見て」

まあ延々とサボらないように、留年するよ、という内容が書かれて

いるだけだ。
プリントを淡々と読み上げる。

「というわけで、サボりもほどほどに」

これで私の仕事は終了。今日は部活もない。

「以上、解散」

今日集まらなかった面子にプリントを渡さなければならぬが、それは担任から渡されるであろう。

「あーバイトだー！」

吉澤が大きく伸びをして、梶山は立ち上がる。二人は科が違うものの友人同士で、校内で一緒にいる場面をよく見掛ける。女子に人気のある二人組なので目立つのだ。
メグが紙袋を持って教卓に走り寄って来た。

「まこっちゃん、今日はねー……」

メグが袋からお菓子を取り出そうとしたところで、多目的室の扉がノックされた。

「失礼します。早良先生」

「はいはい。どうしたの？」

一礼して女子生徒が多目的室に足を踏み入れた、その時。
一瞬にして多目的室が光にのまれた。

あれ、デジャヴ？

「何……？」

ゆるゆると頭を振る。

ものすごく、懐かしい感覚だった。過去二回、味わったことのある。まさか、ね。

「何今の……。あ、早良先生、及川先生が呼んでました」

「及川先生が？ ありがとう」

同僚でもあり友人でもある及川先生^{みづち}。

進学した大学は別だったのだが、偶然同じ母校の教師として再会した。教職に就いてから三人で会うことも多い。春日チャンはさすがに教師ではないが。

「せんせー!!」

後ろの扉から多目的室を出ようとしていた吉澤が、突然大声を上げた。

「外が外！」

「日本語話せ」

「いやいやいや外が外なんだってば！」

「意味わかんないから」

むしろわかりたくない。

後ろより前の扉が近い。扉を開ける。

ああうん、そんな気はしてた。

そこには予想通りの景色が広がっていて。

Hello, Nogg!

人はどこだ。いますぐ出せ。むしろ塩。

ああうん……本当にどうしようか。

今回はどうやら多目的室ごと召喚されてしまったらしい。だけど周りに人はいないし、魔方陣もない。誰にどうやって召喚されたのだろうか。

「何これ……」

呆然と呟く女子生徒。

みっちーのお遣いなら進学科だろうか。見覚えがない。

少々ぽっちゃりとした体型に眼鏡をかけ、真面目で大人しそうな印象だ。

この学校は生徒数がかなり多い。全生徒を覚えるなんてとてもじゃないが無理である。受け持ちじゃないとなおさら。

「あー……」

どう説明したものの。確実におかしい人と思われる。

「まこっちゃん！ 何か来るよ！！」

わー……魔物来た……。肉食、凶暴な魔物だし、とりあえず討伐するしかないよね。

多目的室から飛び出して、魔記号を放つ。

「 / : …… ; ; 」

始末し終えたので多目的室に戻る。グロかったけど大丈夫かな。

四人が啞然として私に注目。そんな目で見ないで……。先生はおかしい人じゃありません……。

「何、今の……」

ぼつりと吉澤が呟いた。言葉にしたのは一人だが、きっと皆そう思ってるよね。

「あれは魔物。私が使ったのは魔法」

「は？」

だから頭おかしくなった？みたいな目で見ないでくれなかな、梶山よ。

「信じられないとは思っけど、私はおかしくなってないし、どつきりでもないよ。ここは地球じゃない異世界。魔物がいて魔法もあるファンタジーな世界」

異世界がノーグだけとは限らないし、ここがノーグという保証もないけど。

魔法は使えたり、見覚えのある魔物だし、たぶんノーグなんだろう。ということは、城へ向かえばすぐに帰ることが出来る。まあ、都合良く精霊の怒りの日が近いかどうかは疑問だが。

滞在日数がどれだけ長くても、戻れば元の日付、時間である。問題ない。

「もっかい言うけど、私おかしくなってないからね？ 実は高校時代にここに来たことがあるんだよね」

「は？」

梶山、は？って言うな。

「前は国を助けてほしいって召喚されたんだけど……今回は人がいないんだよね」

どうなっているのだろう。窓を開け、辺りを見回してみる。

周りに建物はない。広がる草原、ぽつぽつある木。懐かしいアカの実もある。

「とりあえず人を探さないとなー……現在地がわからないと城にも行けないし」

「……よくわかんねーけど、バイト遅刻だ」

あ、バイトの遅刻は気にするんだ……。まあ給料に響くもんね。

「大丈夫、戻ったら時間経ってないから」

五年前私もその点を心配したけど、行方不明扱いにはなっていないかった。不思議なことに滞在中変化したものはほとんど元通りだった。

「マジで？ 良かったー」

「それでどうやったら戻れるの？」

「城の魔方阵から戻れるんだけど、まず城を探さない」と

「え、それって危なくない？ さっきみたいなの、まだいるんでしょ？」

「まあいるけど、そんなに強くないから大丈夫」

四人を守りながらくらいなら、私一人でも大丈夫だ。

問題は地理。それからもし距離があればさすがに私一人じゃ厳しい。二十四時間くらいなら良いのだが。

「とりあえず近くに人がいないか見てくるから皆はここにいて。境界張っていくから出なかつたら大丈夫だからね」

多目的室全体に結界を張り、外に出る。

窓から見た風景と変わらず、建物はゼロだ。城に近いことを願う。精霊の武器を取り出してみる。助かった、どうやら使えるようだ。元の世界に戻った時試してみたのだが、その時は使えなかったのだ。魔法もしかり。やはり魔力が存在しない世界だからだろうか。

剣を片手に歩く。ついでに食料も調達して行こう。どうせならピグウが出ないかな。

迷っても困るから、目印になりそうな木を目標に歩く。

進んで行くごとに周りを見渡すが、一向に建物も人も見えて来ない。高いところに行けば何か見えるかもしれないが、辺りにそれらしきものはない。

木に登ってみるか……。

「よ、つと」

登りやすそうな木を選び、幹を利用し上へ上へと上がる。

登り切り、辺りを見渡す。

方角はわからないが、多目的室の方向に小高い丘があるようだ。

残念、反対向きに歩けば良かったか。

しかし肝心の建物はなし、人も見えない。ノーグはもともと田舎だったし、不思議ではないが。

とりあえず一旦戻ろう。

電波の入らない携帯は夕方六時を示している。

食料は……アカの実しか見当たらない。とりあえずこれで良いか。一日くらい抜いたって死にはしない。

アカの実を採っているとピグウが数匹現れた。私意外と運が良いの

かも。

剣で首を刎ねる。血を抜いて皮をはぎ、捌いて持ち帰らないと、生徒の前でやるとドン引きされるだろう。

しまった……時の魔術、教えてもらっとならば良かった。保存出来ないじゃないか。腐り切る前に五人で食べ切れる量じゃない。干し肉でも作ってみるか。

戦利品しやくりひんを持って多目的室に戻った。

「ただいまー」

「遅いよー!」

「ごめん、ごめん。肉と果物採って来たから夕飯にしようか」

残念ながら調味料ないけど。せめて塩胡椒が欲しいな。

「せんせー、それより喉渴いた! ペット空になったし!」

「はいはい」

空のペットボトルに水を満たす。

「すっげ、これ魔法?」

「そう。あ、たぶん皆も使えるよ」

異世界を渡れば魔力が多いって話だし、まあ水が適正かどうかは別として。

さっそく試す吉澤。

「皆今まで何してたの?」

私が戻るまで二時間ほどあったはずだ。

梶山は寝ていたのだろうと、見ればわかる。私が戻ってからもぴくりとも動いてない。

「携帯いじってた。メールと通話は出来ないけど、iモードは使えたよ」

「カジ寝てるし、俺は携帯でゲームしてた。充電器あるし」

多目的室のコンセント、使えるんだ……。そういえばそうだよな。最初から電気ついたままだったし。どこから来てるんだって話だけど。

「私も携帯です。先生、これからどうするんですか？」

「建物も人も見当たらなくて。朝になったらまた行ってくるから。とりあえず……。ごめん、何さんかな？」

「あ、私は進学二年の速水です」

「メグは恵美萌えみめぐむ！メグって呼んでね。速水何？」

メグが乱入してきた。どうやらこの二人も初対面らしい。進学と商業なので不思議じゃないが。

「速水菜々子。名前嫌いだから速水って呼んで」

「え……。！」

メグは不満そうだ。人懐っこいメグは大抵相手をあだ名で呼んでいる。私以外の教師にも気安フレンドリーい。

「皆顔見知り？」

そういえば昔ここに来たときは、自己紹介したっけ。懐かしいな。

「二人とも目立つし、梶山君は同じクラスなので」

ああ、うん……問題児だしね。騒がしいし。

「カジとヨシは有名人だしねー！ メグはうるさいから目立つだけ！」

あ、自覚あるんだ。

「速水ねー。俺のことはヨシって呼んでー」

吉澤はそのまま名字からとってヨシと呼ばれている。一応教師なので私は名字で呼んでいるが。

メグの場合は……あまりにもメグメグいうので移ってしまったただけだ。一人称が自分の名前の子って最近多い。

「煩い」

煩くて目が覚めたようだ。欠伸をしながら梶山が移動して来た。

「おはよう。とりあえず夕飯にしない？」

「さんせーい！」

とは言っても道具も材料も少ない。

ピグウの肉が美味しくても、調味料がなければ引き立たない。多目的室に鍋があるはずもなく、メグの弁当箱が小さな鍋の代わりになるくらいだ。他は学食派だし、そもそも速水は帰宅途中ではなく靴すら持っていない。

肉を直火で焼き、アカの実をそのまま食べる。それしかない。

素材自体は美味しいけど、これじゃ……しかしどうしようもないし、

今日はこのまま超薄味の夕食となった。早く人を見つけないければ…
…！

カーテンを外し、男女別に包まって就寝した翌朝。
朝食にアカの実を食べ、探索に出かけるその前に。

「一応、魔法教えておく。だけど念の為、ここから出ないようにな」

喉が渴いたとき、私がいないと水がない。それはさすがに不便だ。
結果として水の魔法が使えるようになったのは吉澤とメグと速水。
自分が使える魔法以外も覚えていて本当に良かった。五種類試せば
何かしら魔法が使えるものだ。水が使えない梶山も他の属性ならす
ぐに使えるようになった。五年前は全員水魔法が使えたが、異世界
人全員というわけではないようだ。

そうこうしていたらもう昼だ。
味の薄いピグウの肉を食べて、出掛けることにした。生徒は皆お留
守番。梶山が着いて来たが、却下。

「今日は反対側に行くか」

昨日見た小高い丘に行こうと、昨日とは反対向きに歩き出す。

今日も魔物は見当たらない。討伐の時にしか出歩いてないし元々魔
物がないのか、时期的地理的なものなのか、
判断つかない。

念の為剣は手に持って置く。
丘に辿り着く前に、魔物に遭遇した。四足歩行の獣型。食用用じゃ
ない、残念。素早く切り捨て、革を剥ぐ。ついでに牙と爪も。もち
ろん食べるためじゃなく、売るためだ。町があったら売ってから調
味料を買いたい。塩が欲しい。

数匹屠ってからおやつにアカの実を食べる。他の実も何かないかな。

近くに森とか海があれば食料を探せるのだが。

辺りを見回すが、アカの実以外ない。いや好きだけど、好きだけどさあ……！

不満はあるがとりあえず丘に行こう。それから考えよう。町があるかもしれないし。

丘の手前にアカの実の群生、そして大量の魔物。

「何これ。面倒臭い」

剣で一々斬り殺す数じゃない。

一番楽なのは火の魔法か。森じゃなくて草原だし、少しくらいの自然破壊は許容して下さい。

大型の炎ですべての魔物を燃やし尽くす。食用じゃない魔物の死骸なんぞいらん。

「よじつと」

さて、丘を登りますか。

丘を見上げたところで、懐かしい少女の姿。風に靡く銀色の髪。

「リゲル!!」

私は思わずその名を叫んだ。

勉強って大事だよ、うん。

「何者だ」

「え？」

リゲルに短剣を突き付けられた。何これどういうこと？そっくりさん？

「リゲルじゃないの？ すみません、間違えました？」

こんなにそっくりな人っているんだなあ。

「なぜ私の名を知っている」

「え？」

名前まで一緒のそっくりさんか。そりゃあ不審人物と思われるかも。だからって短剣を突き付けるのはやり過ぎだと思っが。

「すみません、知り合いにそっくりな人がいて。怪しいものじゃないんです」

「どこからどうみても怪しい。どこの人間だ？」

「ええー……五年前までエトランの城に住んでただけど……」

日本なんて答えても意味ないし。

答えた途端にリゲルのそっくりさんの目に再び殺意が宿る。

「エトランに貴様のような者はいないっ！ 正直に答えないと殺す

「！」

「いや嘘じゃないんだけど！ 何なら確かめてくれていいし！」

「私はエトランの長、リゲル！ 私の知らぬ者などおらぬ！」

「ええっ？」

何、何なのこの状況。

どういうことなのか誰か説明しろっ！

「む」

私の後方を見たりゲルが突然丘を駆け上がる。

振り返ってみると魔物の群れ。とりあえず炎の刃で倒していく。

「貴様……！」

今度は何！

倒した途端リゲルのそっくりさんが戻って来た。

「何者だ」

またか！

「早良真琴^{さわまこと}二十四歳、性別女」

「サワラマコトか。変わった名前だ。どこから来た」

「あっち」

多目的室のある方向を指差す。日本は通じない、エトランじゃダメ、ならこれしかない。

「あっち……？ 集落なんてあったか……？」

「集落？ まあ五人で住んでる家があるだけかな？」

「まあ良い。先ほどの炎だがどうやった？」

訝しげに呟いた後、気を取り直したかのように顔を上げた。

うん、リゲルだ。

私の知っているリゲル、そのままの姿。だけど私のことを知らないそっくりさん。

「どうやったって……魔記号だよ。魔法だもん」

「魔記号？」

「魔記号知らないの？ おかしいな、皆知ってるって話だったけど」

あ、そうか。

この世界がノーグだと思い込んでたけど、まったく別の世界かもしれないんだ。異世界Ⅱノーグって先入観があった。

「この世界の名前って何？」

「世界の名前？ そんなものはない」

ないのか。まあノーグじゃないとわかったただけ良しとしよう。

違うのに言葉は通じるんだ。私は今大陸共通語を話してるつもりなのだが。

「うーん……とりあえず塩とか砂糖とか、調味料売ってくれないかな？」

「……譲れということか。何か交換出来るものは？」

「交換……？ あ、これは？」

毛皮に牙に爪。現金は持っていないので、これで勘弁してください。

「これは……！」

毛皮を手に目を見開くリゲル。何事？

「貴様、これをどこで！」

「あつち」

多目的室の方を指差す。

「信じられない……貴様ら、五人と言ったな……何ということだ……」

「え？ 何？ 何かまずかった？」

まさかペットでしたってオチはないよね？ もう殺しちゃったし！

「この魔物は、私たちではもっと大人数でないと敵わない」

「え？」

そんな強い魔物ではなかったはずだが。

リゲルはわなわなと震え、きつと顔を上げた。

「頼む！ 手を貸してくれ！」

「え？」

私え？しか言っていない。

多目的室に戻る途中、詳しい話を聞いた。

何でも強い魔物が現れて、集落の男連中がやられてしまったらしい。残った中で戦えるのはリゲルのみ。あとは老人、女、子供。魔物に破壊された集落を捨て、この辺りまで逃げて来たという。今は魔物が寄り付けない洞窟で生活していると。

調味料や道具などを譲ってもらう代わりに、魔記号を教える話がまとまった。一々通うのも面倒だし、この際四人を連れて洞窟に移住しようという話だ。人は助け合って生きていかなきゃね、うん。

「ただいまー」

「まこつちゃん！ おかえりなさい！」

椅子に座っていたメグが立ち上がり、走り寄って来た。

「人だ！」

リゲルに気付き、吉澤と速水も寄って来た。

リゲルは眉を顰め、三人を見返す。

『何を言っているのかわからない』

『えー……やっぱり大陸共通語じゃないとダメか……』

面倒くさいことになったな。

リゲルたち集落の人間と話せるのは私だけってことか。

『リゲル、髪の毛くるくるしてる女子がメグ』

『メグ』

『金髪の男がヨシ』

『ヨシ』

『眼鏡の女子がハヤミ』

『眼鏡？ ハヤミ』

あ、眼鏡が通じてない。眼鏡がない世界なのか。

『で、黒髪ゆるパーマがカジ』

『ゆるパーマ……？ カジ』

パーマもないのね。

「えっと、この子はリゲル。突然だけどリゲルが住んでる洞窟に間借りすることになった」

「間借り？ なんでー？」

「戦える人がいないみたいで、大変そうだから人助けかな。とりあえず移動するから、荷物持って」

暗くなる前に移動したい。

ついでに魔物討伐もさせておくか？余裕で勝てるはずだが、生徒に殺生を勧めるのもなあ。

私物は吉澤の鞆に一緒に入れてもらい、カーテンは梶山に持ってもらう。私は手ぶら。一応手を開けておかないと、戦い難いからね。

「じゃあ行くよ」

電気を消して、さあ出発。

さくさく魔物を倒しながら丘を目指す。

途中速水がスプラッタに貧血を起こしそうになったものの、無事到着。リゲルが戦闘の度に感嘆の声を漏らすのがちょっと面白かった。

丘を登ると洞窟があった。

洞窟というより、巣穴。すぐく見覚えがある。でも周りにあったはずのアカの実はない。似ているだけか。もしかして、あれか。パラ

レルワールドってやつ。

洞窟内は薄暗く、照明は松明。入ってまっすぐいくと開けた場所に
出、そこから五つに分かれている。やっぱり、精霊の武器のあった
場所と同じだ。

一番左端の通路を行くと、木で出来たテーブルとイスのある空間。

「この部屋を使ってくれ。何もなくてすまない。ひとまず夕食の準備
が終わったら呼びに来る」

リゲルが行ったことを確認し、この世界の情報を四人に話す。

「え？　じゃあ帰る方法がわからないってことですか？」

「うん、ごめん……知ってる世界じゃなかったみたいで」

「そうなんですか……」

速水ががっくりと肩を落とす。

期待させておいて本当に申し訳ない。まさか違う世界だとは思っても
せず……。

「ねーせんせーはその魔方陣作れないワケ？」

「うっ……ごめん、さすがに覚えてない……」

過去に二度、それも五年前に見ただけの魔方陣だ。こんなことにな
るのならもっと勉強しておけば良かった。

「とりあえずー、まこっちゃん、人助けするんでしょ？　何すんの
？」

「ああ、うん、魔法の使い方を教えようと思って」

魔法らしきものはあるが、魔記号はないという。リゲルの集落では

限られた人しか魔法もどきが使えなかった。パラレルワールドだと違うのかもしれないが、ノーグでは皆魔法が使えていた。だとすれば魔記号さえ教えれば皆魔法が使えるのでは？という話になったのだ。

「で、報酬ってというか、まあ調味料とか分けてもらおうと思って味の無い食事が続くなんて苦痛だ。」

「なるほど。その間メグたちどうすんの？　ここ充電ないし、暇だよー」

「その前にせんせー。俺シャワー浴びたい」
「あ」

そうだった……。すぐに帰れると思って、お風呂の存在を無視していた。

「あとでリゲルに聞いてみる」

その言葉に一同ほっと息を吐く。召喚されてからも二十四時間経つもんね。

リゲルが夕食が出来たことを知らせに来た。今度は右端の部屋に移動。

「うっ……」

思わず声が漏れた。

なんていうか……すごく、臭いです。

「まこっちゃん……」

メグが涙目で訴えてくる。だがしかし、どうしろと。何、ゲテモノ料理なの？

テーブルの上にはごく普通に見えるスープ。そしてそれを囲う四人の子供。

「どうした？ 席についてくれ。食事にしよう」

「リゲル……つかぬことをお伺いしますが」

「何だ」

「お風呂って知ってますか」

「お風呂？」

聞き返された。駄目だ、これは駄目だ！

「体を洗ったり」

「ああ……水浴びか」

「水浴び……どれくらいの頻度で……」

「三日に一回くらいか。最近はちよつと……中々……」

リゲルも手一杯で、水浴びが難しいのだろう。見たところ水道もないし、魔法も確立してないし。

毎日お風呂に入り、清潔にしている私たちにとって、これはキツイ。左端の部屋はニオイもなかったのだが。

しかし臭いなど言うわけには……言っただけで今すぐどうにかなるものでもない。我慢だ。我慢するしかない。

「って無理！ この異臭の中でメシが食えるかあああああ！」

浄化の魔術を覚えていて本当に良かった……ッ！

食料探しは重要です。

四人の子供たちと部屋を浄化したあと、夕食をいただいた。夕食は肉と芋のスープのみ。味付けは薄い塩味。かなり薄い塩が入っているだけ良い。

『おねーちゃん、すごい！』

金髪の女の子にすぐキラキラした目で見つめられる。浄化の魔術が大変お気に召したらしい。

『わたしにもできる？』

『すぐ練習したら出来るからもしれないね』

異世界人ではないので絶対とは言えない。浄化の魔術は精霊の巫女が得意とするもので、国民全員が使えるものではなかったはずだ。魔法と一緒に利便性のある魔術も教えてみよう。

生徒四人はスープを黙って食べているが、不満そうだ。確かにもうちょっと味が欲しい。

『リゲル、塩は貴重なもの？』

『いや、貴重というほどのものではないな。海へ行けばいくらでもある』

貴重じゃないのなら、こういう味付けなのだろう。子供たちが普通に食べているのがその証拠。

デザートに手持ちのアカの実を出す。

『これは……魔物のエサじゃないか!』

『え? アカの実って言うんだけど』

リゲルたちは魔物のエサって呼んでるのか。

『食べられるのか……?』

『美味しいよ』

リゲルと子供たちにも差し出す。恐る恐る口に入れる様子がかわいらしい。

『おいしい!』

子供たちがきゃっきゃと喜ぶ。リゲルの頬も緩む。

食事を終え、他の部屋を見せてもらった。

右から二番目の部屋が台所、真ん中の部屋とその隣の部屋が雑魚寝部屋のようだ。案内してもらいながら浄化していく。

「まこっちゃん。メグにもそれ教えて」

「そうだね。その方が良いかも」

手軽にシャワー、というわけにはいかないし、浄化は使えた方がよい。四人に浄化と念の為に治癒も教える。習っておいて良かった。

治癒は私自身苦手な部類だが、何とか教えることが出来た。

意外なことに吉澤に才能があるようだ。精霊の巫女というだけあって女子限定かと思ってたのに。

浄化は全員出来るようになった。異世界人すごい。

見たところ老人が十名弱、妊婦さんが二名、リゲルより年上そうな女性が三名、幼稚園児以下の子供が数名といった感じだ。それにリゲルとさっきの四人の子供。

四人の子供は小学校の低学年くらいだろうか。

この中で戦えるのはリゲルだけ。二十名以上を一人で支えて生きていくということか。すごいな。

魔物あり魔法なしで生き抜いているってすごいことではないだろうか。

『あの三人は戦わないの？』

リゲルより年上そうな女性だ。妊娠しているわけでもないのなら戦えそうなんだが。

『私の集落では女は織物や野良仕事などをして家を守る。男は鍛冶や狩りを担当するんだ。単純に彼女らは戦う術を持たない』

訓練すれば戦えるってことかな。剣はともかく魔法を覚えればすぐにも戦えるかもしれない。とにかく戦力が欲しい。

『織物と鍛冶……剣とか鍋とか服とかある？』

『少しなら。集落の跡地へ行けばまだあるかもしれないが』

ああそうか。ここが本拠地じゃないんだよね。

私は光と炎の剣があるから良い。できれば四人、いや二人かな……吉澤と梶山に剣が欲しい。すぐに帰れないならば武器があった方が良さそう。

浄化の魔術があるとはいえ、替えの服は欲しいし、調理器具も欲しい。リゲルたちと味の好みが合わない。

『服を四着もらえないかな』

私はジャージだから良いとして。他の四人は制服だ。汚れたり破れたりすると困る。卒業まであと二年近くあるわけだし。

『彼らのか？ わかった。明日の朝までに用意しよう』

一通り挨拶と浄化を終え、部屋に戻る。

枯草の上にカーテンで包まる。もつと安眠出来る寝具が欲しいが、それは贅沢か。

毛皮を集めて枯草に被せるくらいしか思いつかないな。布がもつとあれば一番良いのだが。

翌朝、各々浄化の魔術で身支度を整え、朝食をいただいた。
メニューは肉と芋の薄塩スープ。

……あの、もしかして、メニューは一択なのでしょうか。
リゲルに詳しい食事情を聞いてみた。

まず肉。これは草食動物や魔物が狩れた時のみ。

野菜。集落には畑があった。今はない。近くに芋が自生。
魚。海や川で運よく取れば。

……うん。今までよく頑張ったよね。この洞窟に移り住んで十日程らしいが、死者はゼロらしい。

今日は食料探しに行こう。絶対行こう。

ちなみに主食は芋で米や麦はないようだ。

リゲルと女性三名、子供四人を集め、魔法の講義を行う。

適性はわからないし、あの石もないので、全属性の基本を試してもらった。

リゲルは火と水。エトランの長の一族は代々炎を操れるのだとか。魔記号はないものの、魔法は存在しているらしい。魔記号を使うことでリゲルの魔法の威力が増した。原理はわからないけど、魔記号すごい。

残りの七名は一人一つの属性しかなかった。しかもかろうじて反応したかな、というレベル。改めて異世界人ってすごいんだな、と実感した。

それぞれの適性も判明し、基本中の基本は教えたのであとは練習あるのみだ。

浄化の魔術も教えてみたが、やはり結果は芳しくない。金髪の女の子と女性が一人、何とか使えそうだ。

『浄化はカニヤとカナリアだけか……便利なのにな』

リゲルが呟く。

『まあ十分の一なら十分じゃないかな』

『そういつものか？』

『そういつものです』

小さい子たちや老人にも教えれば、まだ増えるかもしれないけど。

『そうだ。昼から食料探しに行くから、地図書いてくれる？』

私物のルーズリーフと万年筆を取り出す。魔力でインクが出る懐かしい万年筆だ。元の世界では使えなくなってしまったのだが、ずっと筆箱に入れていた。

『これはすごいな……』

リゲルが呟く。この世界にはないのかな。文明レベルは高そうに見えるが、実際住んでいたところを見たわけじゃないので何とも言えない。

完成した地図を見る。現在地から多目的室方向を東と仮定しよう。残念ながらこの世界での日の出では方角がわからない。習ったはずだが、単純に忘れただけだ。

その仮定で言うと西に小さな森、そこから北上すると海、南下すると川、さらに南下するとリゲルの元いた集落の跡地。まずは森と川から攻めようか。海は少々遠いようだ。

『じゃあ行ってくるから、リゲルは魔法の練習でもしてて』

こくりと頷くのを確認して、私は二人を呼びに行った。

リゲルに書いてもらった地図と借り物の剣を持ち、男子二人、吉澤と梶山を連れ、森へ向かう。

面白がって戦いたがる吉澤と面倒臭がり気だるげな梶山。何でこの二人は仲が良いのだろう。進学科と工業科でクラスは違う。中学が同じだったのだろうか。

「ねーせんせー、結局この世界って何なの？」

「何……んー……ごめん、よくわからないんだよね……」

「前来た世界ってのは別？」

「別みたい」

すごく似てるのに、ところどころが違う。リゲルなんてそっくりなのに。

「何で別だつて思ったの？ 最初同じつて言つてたのに」

「え…… 見覚えのある魔物だったし、魔法使えたし…… だけど、知り合いだと思つたりリゲルが私のこと知らないし」

「ふーん？ リゲルつてあの銀髪だよな。まったく一緒に ちよつと若かつたりしない？」

「まったく一緒に見えるけど……」

「じゃあ違うかなあ。そんだけそっくりなら違う世界つていうより過去つて感じじゃん？」

「え？」

過去？

「過去……」

「でも見た目同じなら違うかあ。せんせーが前に来たとき、戻つても時間経過してなかつたつて言つてたじゃん？ つてことはこつちとあつちの時間が一緒じゃないつてことじゃね？ なんていうの？ 平行じゃないつていうかー」

言われてみれば、それはそうだ。五年経つてノীগにまた召喚されても、帰つてから五年後のノীগだとは限らない。可能性はゼロではない、だけど確証はない。

「ええー…… つてことはもしかしたら、そのうち召喚方法が発見される……？」

だが。もしこれが過去だとして、リゲルが私に何も言わないなんてあるだろうか。

リゲルが覚えていなかった？ それとも言えない事情があつた？

いや覚えてないなんてないだろう。たとえばここが過去のノীগならば、リゲルの外見から考えて最長760年前だ。些細なことなら

760年経てば忘れるだろうが、魔記号を初めて知ったきっかけを忘れるだろうか？ 少なくとも760年後の再会で何か思い出さないだろうか？ そっくりさんに会ったことがある、とでも漏らさないだろうか？

考え込んでいる間に森に着いた。

食料を探す。討伐や野外訓練の時に食べられる植物は一通り習っているのだ。

ノーグでの砂糖の原材料となる蕪もどき、見た目がどんぐりのような木の实、薄紫の实、ちよっと苦味のある葉っぱ、トマトもどき等々。

パツと見ただけでも食料はたくさんある。魔物も多いので、魔法なしで単独だとつらいだろう。

魔物の肉や皮、牙などを採取しながら進む。

川では魚もいたし、貝も取れた。時期が良いのか大振りだ。道具がなくても魔法や魔術の工夫次第で何とでもなる。

調味料やスパイスの類は結局砂糖だけか。

「せんせーこれ、食べてみていい？」

吉澤が薄紫の实を指差す。頷く。一つくらい減っても大丈夫だろう。足りないならまたとれば良いし。

「うまつ！ あまつ！ ほら、カジも」

吉澤から実を受け取り、梶山もその実を口にする。

「旨い、な」

「めっずらしー！ カジが旨いだってー」

「昨日今日とロクなモン食ってないしな」

梶山がため息を吐いた。

「冷えてればもっと旨いんだろうけど」

「あ」

「どしたのせんせー」

「冷蔵庫欲しいよね」

冷蔵庫があれば肉の保存が出来る。魔動具作りは少しだが習っているので、何とかなるかもしれない。特に冷蔵庫はジロが実験しているところを見学したので、何となく覚えている。
となるとまずは魔動石か。戻ったらリゲルに聞いてみよう。

聞き覚えがあるような……？

洞窟に戻ると、八人と二人が魔法の練習をしていた。

言葉は通じないはずだが、身振り手振りで意思疎通をはかっている。何だか微笑ましい。

「ただいま」

大量の獲物を見つけた子供たちが寄って来る。

リゲルはその後ろから苦笑いしながらゆっくりと歩いて来た。

『すごいな』

リゲルがほつつと息を吐く。

『全部食べたことある？』

『いや……これとこれはないな……』

トマトもどきと貝だ。

集落は山の中と言っていたので貝はともかくトマトもどきはあるそうなものだが。

『この実も魔物のエサだ。魔物が好むものはすべて魔物のエサと呼んでいる』

リゲルが薄紫の実を指差す。

なんて安直な。まあ名前なんてそんなものか。

薄紫の実はちょうど今からが旬だ。五年前のこの時期によく食べていた気がする。

『おねーちゃん、すごい！ きょうはごちそうだね！』

『いっぱい食べていいからね。魔法は使えるようになった？』

『うん！ わたし、火と水と風がつかえるよ！』

『三つも？ すごいね』

金髪の子供が笑う。確か浄化も使えたはずだ。魔法の才能があるのだろう。

『カニヤばつかずるい！ 俺は何で一個なんだよ！』

『まあまあ。ラールはそのかわり、剣の扱いがうまいだろう』

激昂する赤毛の子供に、黒髪の子供が宥める。

『フリースは女に負けて悔しくないのかよ！』

『カニヤは三つの魔法が使えるけど、ラールほどの剣技は持っていない。それに弓ならばくの方が上手い。人それぞれだ』

言ってることが子供らしくないなあ。

『魔法も剣もどうだっていいわ。それよりおねーさん。食事の準備、手伝います』

『ん？ ありがとう。私のことはマコでいいよ』

おねーちゃんとかおねーちゃんとか、呼ばれることに慣れていないので反応が遅れる。

『私のことはルオアと呼んでください』

カニヤ、ラール、フリース、ルオア。

何となく聞いたことがあるような気がするんだけど……なんだっけ。思い出せないってことはきつと大したことではないだろうけど。考え込んでいる間に話がまとまった。リゲルと子供二人と一緒に夕食を作ることになり、台所に食料を運ぶ。

台所の隅に石で作られた竈が二つ、並んでいる。

一つには大きな鍋が設置されており、その隣の竈には何も置かれていない。こちらは肉をそのまま焼く時に使っらしい。

反対の隅には水瓶が置かれている。

木で出来たテーブルの上に食料を置いた。テーブルの下のかごの中には芋が山盛りだ。

基本的にリゲルたちの食事はスープだけだ。食料不足だから致し方なく、である。今日は食料が多くあるし、魔法が完璧になれば私がいなくても食料に困ることはないだろう。

貝と塩でスープを作る。肉の塊と魚、芋は直火で焼き、塩を振る。葉っぱは茹でてトマトもどきと塩で揉んだ。デザートに薄紫の実。どنگりもどきはすぐに使えるものではないのでまた次回にでも。

この日の夕食も四人の子供たちと一緒に左端の部屋で食べる。

「まこっちゃん、これおいしい!」

「せんせー、おかわりある?」

今回は各自で塩を追加できるように、別添えでテーブルに置いてある。塩の消費量が増えるだろうから、明日にでも海に行こう。

「先生、明日は私たちもついて行きたいです」

正直、女子はあまり連れて行きたくない。顔や腹を怪我したらどうするんだ。男子なら良いってわけでもないのだが。

「いいじゃん。ここにいっても暇だしさー」

携帯の充電はとうに切れているだろう。テレビもなければ本もない。鞆の中に教科書くらいはあるだろうが、それだけだ。

「でもなあ。携帯の充電に多目的室に戻るつてので手を打たない？」

「ヤダ！」

「えー……」

どうやら留守中に二人で話し合って決めたらしい。速水はともかく、メグは頑固だ。こっそりついてこられても困るので、了承した方が安全だろう。

「それでさー何かわかった？ 帰れそう？」

「うーん……」

正直なところ、この世界がノーグか否か。それがわからない。

ここがノーグで、760年より以前の可能性が高い、とは思っ。

だけど決定的な証拠があるわけじゃないし、でもそれを言つと760年この世界で生き続けないと確定しないような気もする。

だめだ！

私頭使うの無理！ 本当無理！

悩むなら皆で悩もう、そうしよう。

「吉澤と話してさ、この世界が私の知ってる世界の過去なのかな、

とも思う」

「過去つてどんくらいー？」

「760年かな」

「古っ」

「……根拠あんの？」

「えっとね、今この世界に名前はない。魔物の種類、食べ物など一致するものが多い。あと場所、この場所に来たこともある」

「この場所つてこの洞窟？」

「うん。丘の上にある巣穴っぽくて、中が五つに分かれてて」

違うのは外にアカの実が生えていないこと。城が見えないこと。城の位置には多目的室しか見えない。

「で、ノーグでは760年前に世界の名前と年号が出来た」

考えて話すのではなく、事実を簡潔に述べていく。

私は頭脳派じゃないんだ。

「そして、リゲルがいる」

「リゲルつて……この人だよな？」

「そう。リゲルは不老不死で……五年前ノーグで出会った彼女はそのままの姿だった」

服装や髪の色は違いますが、他に何も変わりがない。

『リゲル、リゲルは不老不死じゃないよね？』

『何を言ってるんだ？ 私は人間だぞ』

つまりは、ここが過去だと仮定すると760年以上前のはず。

外見から考えると、リゲルはもうすぐ不老不死になるのではないだ

ろうか。

「まだ不老不死じゃないみたいだから、もしここがノーグの過去だとすれば760年以上昔ってこと」

ということは、だ。

召喚魔法が生み出されるのはいつ？

それまで待てば帰れる？

歴史の勉強の中で召喚魔法なんて出てこなかったぞ……。

「未来のリゲルが私に何も言わなかったってことは、言わない方が良かったんだと思うんだよね」

もしも死ぬ運命だったりすれば、リゲルは何らかの措置を取ってくれたと思う。いくらなんでも見捨てたりはしないだろう。

ということは、おそらく帰れるはずだ。

思い出せ、歴史の勉強！

あのつらい日々を思い出せ……！

「召喚魔法の登場なんてやっぱなかった気がする……」

「え？ どういうこと？」

「いつ召喚魔法が生まれるかわからないんだけど……でも帰れると思っ」

「どっやって？」

「召喚魔法がないなら、作ればいいじゃんね。うん」

何事も前向きに！

為せば為る、為さねば為らぬ何事も！だよ！

「出来るの？」

「たぶん！ いけるはず！ でも時間はかかると思う。ごめん」
「いいよー。あの時間に戻れるなら問題ないし。ファンタジーごっこ出来てお得じゃーん」
「メグ……」

何ていい子なんだ。先生は感動しました。

「ま、いいんじゃない？ ゲームみたいで楽しいしー」
「暇つぶしにはなるだろ」

「貴重な体験ですし、何か学ぶものもありますよ」

一緒に召喚されたのがこの四人で良かった。

本当は怖かったり、イラついてたり、不安だったりしてるかもしれない。だけど表面にそれを出さず、気遣ってくれる。

大人なのに私、情けないな。

待っててね、絶対、帰る方法見つけ出すから！

海へ行こう！

朝食にトマトスープを作った後、リゲルに魔動石のことを尋ねた。

『灰色の石？ そちら中にあると思うが』

聞き方が悪かった。いやしかし他にどうやって聞けと。

魔動石という単語も、魔法という単語もない世界。

魔動具があるとは思えない、が。

昨日の食事作りでは、リゲルが魔法で火を起こしていた。
照明器具はもちろんない。松明だし。

「うーん……」

私の目には普通の石と変わりなく見える。違う点は動力として使えるかどうか、だ。それを言葉で説明するのは難しい。見せるにしても目の前にあるわけでもない。

一つ目は自分で見つけ出さないと、ってことか。

『ねえ、リゲル。マコの言ってる石、ルオアのコレクションの中にないかなあ？』

『ルオアのコレクション？』

『うん。ルオアね、色んな石を集めてるの。でもルオアはケチだから、わたしたちにはさわらせてくれないの』

色んな石のコレクション、ね。そういえば私も、子供色々集めてたっけ。

ルオアも色や形の面白いものを集めているのだろうか。仲間にも触

らせないものを、余所者である私に見せてくれるか疑問だが。

『ねールオアー！ コレクション見せて ！』

カニヤが大声で叫ぶ。ルオアは眉を顰め、首を振った。

『いやよ、カニヤ、触ろうとするじゃない』

『触らないから、いいでしょ？』

『嘘ばかり。この間もそう言っただけに触ろうとしたじゃない』

『ルオアのケチ！』

『ふん、ケチで結構よ』

言い争いを始めてしまった。置いてきぼりだ。

『えーっと……あのね、魔法の石を探してるの。協力してもらえないかな』

ルオアは小学校低学年くらいの見た目だが、精神的にはもう少し大人な感じがする。話せば分かってくれそうだ。

『魔法の石？』

『そう。魔動石っていうんだけどね。それを使えば便利な道具が出るっていうか』

魔動具を作るときに使う小刀も、筆箱の中に入れておけばなしになっている。魔動石があれば、魔道具を作るとは可能。記憶が正しければ、であるが。

『……待ってて』

どつやら見せてもらえるらしい。安堵の溜息が漏れる。持って来た木箱を開けると、色んな形の石が入っていた。よく見ると天然石も交じっているようだ。

『これ』

その中の灰色の石を一つ取り出す。

一見大きめの普通の石だが、かすかな魔力を感知できる。

『この石がいつぱい欲しいんだけど、どこにあるか覚えてる?』

『……その石は、集落を登ったところにあつたものだわ』

しまった。

ルオアは悲壮な表情を浮かべる。子供らしくない表情。

集落はすでになく、その時に家族を失っているはずだ。小さな子供にこんな表情をさせてしまうなんて。

『しゅめん』

『気にしないで。よくあることよ』

よくあること。

ここは子供からこんな言葉が出てくるような世界なんだ。

『でもこれからは違うわ。魔法があれば、魔物になんて負けない。もう誰もなくさない』

こんな時、何を言えはいいのかわからない。

私が困惑していることに気付いたのか、ルオアが笑顔で顔を上げた。

『ね、この石で何が出来るの?』

しかし、二十近く年下の子供に氣遣われるとは……。

『冷蔵庫が最優先かな。照明とお風呂はまあ、何とかなってるし』

『冷蔵庫？』

『うん、食べ物冷やす箱、かな』

ルオアが首を傾げる。百聞は一見にしかずだ。作ったものを見ればわかる。

他の場所で魔動石がないかどうか、探してみよう。

本来なら交通手段には馬があつたらしい。が、集落を襲われたときに全滅してしまっており、五人は徒歩で海に向かう。先日の川の辺りから北上すれば海だ。

青い空、白い砂浜、透明度の高い青い海。

木造の家が数軒、それも崩れかけ。すぐに沈みそうな木の小舟。破れた網。

「うわぁ……」

この海の集落も魔物に襲われ、どこかに避難したらしい。リゲルの話だと塩はこの集落の貯蔵庫から自由に持って行って良いとのこと。正直話がついているのか疑問である。しかし怖くて聞けなかった。

崩れかけの家の地下部分に、その貯蔵庫はあつた。中には塩と乾燥した海藻。これも頂くとしよう。何というか、泥棒気分なんだが。

「まこっちゃん！ 泳ぎたい！！」

メグがはしゃいだ声を出す。

季節は春。水温も低い。さすがに寒いんじゃないだろうか。

「風邪ひくよ」

「えー……じゃあ、夏になったらまた来ようね？」

「そうだね。その時は水着も用意しないと」

服のままだと泳ぎにくいだろう。浄化があるから着替えはいらないにしても。

水着自体はなさそうだから、代用品になるものを探さないと。

「……ヨシ、行けよ」

「うー……やっぱり？」

「何？」

梶山に押し出されるように、吉澤が前に出る。不貞腐れたような顔をしている。

「せんせー、ちょっと素潜って来る」

「え？」

「サザエとかアワビとか探しに行く」

「ヨシなら男だからパンイチでもオツケーだろ」

まあそれはそうなのだが。

「素潜りはよくやってるから大丈夫ー。行ってくるね」

銚子の代わりに剣を持ち、吉澤は海に飛び込んだ。

その間に他のメンバーで海周辺の食料探し。浜大根やおかひじき、カメノテなどを発見。メグと速水は海で膝まで浸かり、遊んでいる。かわいらしい。

私は梶山と岩場に腰掛け、休憩。

「梶山つてあんま喋らないよね」

「……第一声がそれか」

梶山の声は低いから、ちよつと聞き取り辛い。

「別に、喋らないってわけじゃねーよ」

若干不貞腐れたように言う。無表情かと思ったが、そうでもないのか。

クール、大人、落ち着いてる、取っつき難いし冷たい、だけどそこがイイ！などと評判な梶山だ。顔はいいけどチャライ、でも話しやすいし優しい、と言われている吉澤との合わなさそうなコンビが女子に人気だ。私が高校生の時は吉澤タイプは少なかったが、年々増えていっているような気がする。逆に梶山タイプが減っている。

「……先生、結婚するってマジ？」

「え？」

「プリンスホテルのウェディングのところで、及川といるところ見たつて」

「ああ……あの時かな……」

一瞬私のことかと思った。及川先生と春日チャンの結婚式の打ち合わせで、先日プリンスホテルに行ったのだ。私は春日チャンの希望で友人代表諸々をすることになっている。

「来月だし、早く帰らなきゃ」

ジューンブライドなのだ。ただしジューンブライドに拘ったのはみっちーで、春日ちゃんではない。それを聞いた私は大爆笑し、みっちーに睨まれた。

梶山が何か言おうとして、口を開く。が、それはメグの大声で中断された。

「まこっちゃん！ ヨシ帰って来たよー！」

「今行くー！」

メグがぶんぶんと手を振っている。おお、大漁だな。

「よし行く。……梶山？」

「……何でもない」

カメノテとわかめの塩スープ、各種貝の浜焼き、茹でた芋などで夕食をとった。

相変わらず塩味のみだが、食材が増えたことでだいぶマシな食生活になった。漁村なのに魚醬がなかったのが残念だ。

「あ、そーだ！ お菓子忘れてた！」

メグが紙袋からお菓子を取り出す。

「まだ大丈夫かなあ」

パウンドケーキとジャムサンドクッキーのようだ。それを少しずつわけて皆で食べる。

『こんなおいしいもの、食べたことない』

リゲルや子供たちは初めて食べたお菓子に感動しているようだ。クッキーは少し湿気ていたが、それでも十分美味しかった。

「何て言ってるの？」

「美味しいって。こんな美味しいものは初めてだって言ってる」「ほんとー？」

自分の作ったものを褒められて嬉しそうだ。

「レシピはあるから、材料さえあればもつと作れるのにね」

残念ながら小麦粉もバターも卵もない。卵なら探せばありそうだが、小麦粉とバターに関してはお手上げた。

「あ、でもどんぐりもどきの粉ならあるか」

森で収穫したどんぐりもどき。これは干して潰して粉にしてある。小麦粉よりもアクが強く、クセもあり、もさつとしているが、小麦粉の代用品に出来ないこともない。

「砂糖もあるし、果物もある」

明日の行動が決まったな。魔動石と卵探しに決定である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0810ba/>

Which came first, the chicken or the egg?

2012年1月9日00時47分発行